

いぬ



ワンクワガタコガネの大腿の変異

NO. 12

1988年11月

日本鞘翅目学会

No. 12

1988年11月

日本鞘翅目学会

いぬばねいぬばね

いぬばね

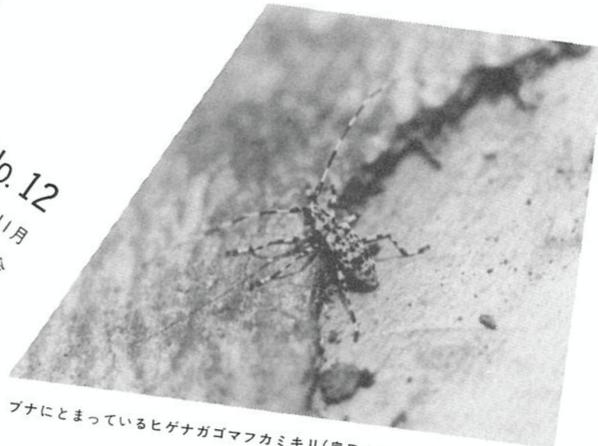


奥日光香沢のキジマトラカミキリ

No. 12

1988年11月

日本鞘翅目学会



ブナにとまっているヒゲナガゴマフカミキリ(奥日光 大沢 1982年6月19日)

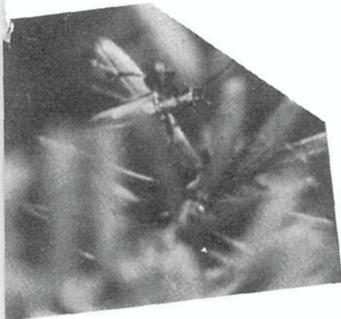
NO. 12

1988年11月

No. 12

1988年11月

日本鞘翅目学会



さ や ば ね No.12 目 次

日本鞘翅目学会第10回大会講演	1
第11回・名古屋支部例会記	2
日本鞘翅目学会第12回大会講演	3
会員動静	7
会務のご案内	10

表紙題字：畑山千枝

表紙：さやばね No.7～No.11表紙より

日本鞘翅目学会第10回大会講演

日本鞘翅目学会第10回大会は、昭和60年11月10日に東京浜松町の機械振興会館にて開催された。

講演は以下の特別講演1題であった。

南西諸島のハムシ相をめぐって

久留米大学医学部進学過程生物学教室 木元 新作

南西諸島のハムシ相の特徴的な点は、次のように要約される。

1) 多様性に富む南西諸島のハムシ類

島嶼の生物相は一般に多様性が低いとされているが、亜熱帯に位置する南西諸島と温帯の北限にある南千島を比較すると、種数は明らかに南西諸島が多い。

2) 固有種に富む南西諸島のハムシ類

南西諸島のハムシ類の中には、日本や台湾から近縁種の発見されない種類が数多く知られている。*Epiluperodes ryukyuna*, *Hemipyxis takari*などはその例である。

3) 種の変異に富む南西諸島のハムシ類

南西諸島のハムシ類は種内変異に富むのが特徴的な点である。その例として、*Aulacophora nigripennis*, *A. bicolor*, *Acrothinium gaschkevitchii*, *Platycorynus japonicus*, *Cryptocephalus perelegans*, *C. loochooensis*をあげることができる。

4) 調和の乱れた南西諸島のハムシ相

生物相を構成するいろいろな分類群の比率もまた、生物相の特徴を表現する一つの指標である。

ハムシ類については、日本列島の北から南へ、サルハムシ亜科の種数が増大し、ハムシ亜科が減少するという、亜科による種類組成上のクラインが認められる。南西諸島の亜科による種数組成は、一見日本列島におけるこのような傾向の延長の感を呈するが、台湾のそれとは極めて異質である。

台湾のハムシ相は、南西諸島と比較してノミハムシ亜科の比率が低く、ヒゲナガハムシ亜科が高い。このような傾向は、東洋区に属する太平洋の島々における一般的な傾向である。

南西諸島におけるノミハムシ亜科の優勢な傾向は、トカラ列島、宮古島、与那国島などの小島嶼において、より強く認められ、日本本土や台湾とも相違する、極めて調和の乱れたファウナを呈していると判断される。

約200年前の火山活動によって、生物相が消滅したと推定される八丈青ヶ島のハムシ相は、このような傾向が更に強化された形で再現されており、ノミハムシ類の移住、定着能力の強いことが推定される。

第 1 1 回 ・ 名古屋支部例会記

井野川 重則

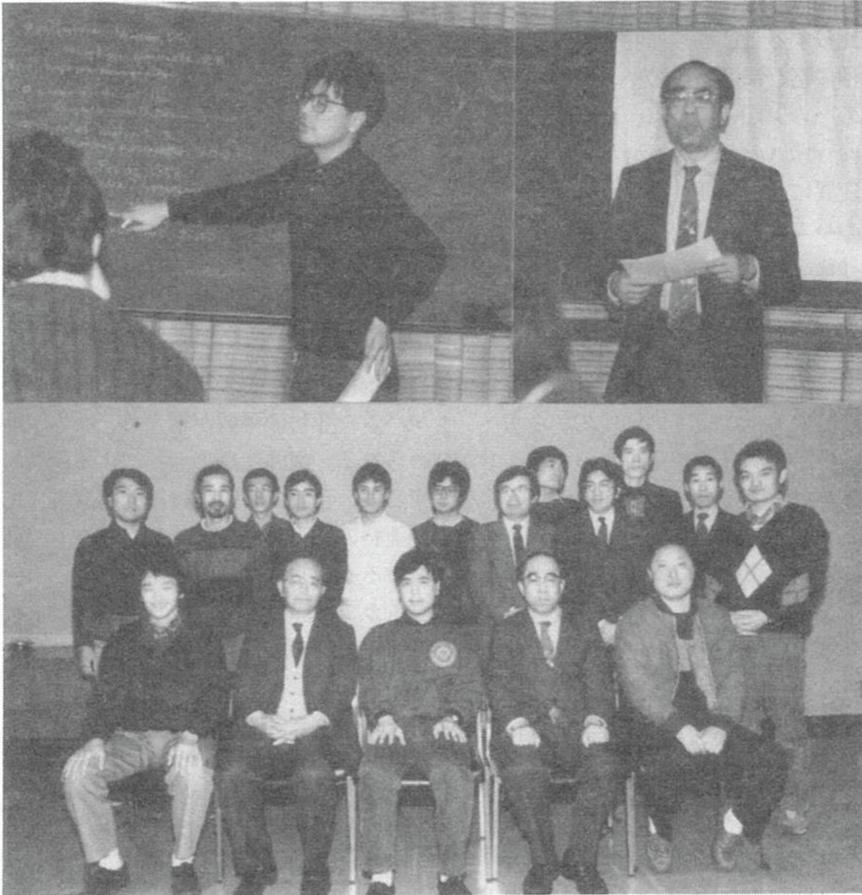
昭和62年3月8日愛知県産業貿易会館において、第11回日本鞘翅目学会名古屋支部例会が開かれた。
講演は以下の2題が行われた。

新里達也・・・「台湾産ヒゲナガコバネカミキリについて」

佐藤正孝・・・「ジョウカイボン科について」

参加者（順不同 17名）

大塚 篤、 生川展行、 岩崎 博、 蟹江 昇、 水谷高弘、 谷川稔洋、 長谷川道明
河路掛吾、 新里達也、 松永晴彦、 後藤武司、 穂積博文、 佐藤正孝、 井野川重則
高井 泰、 野平照雄、 太田克人



日本鞘翅目学会第12回大会講演

日本鞘翅目学会第11回大会は、昭和62年11月8日に東京浜松町の機械振興会館にて開催された。講演は会長の講演、以下の特別講演1題と一般講演4題であった。

(特別講演)

甲虫目の幼虫の形態と機能

法政大学第二高等学校 林 長閑

甲虫目繁栄の一つに、幼虫期における形態の著しい分化と機能が考えられる。よく発達した体壁は極端な扁平化、肥満化にも耐え、あるものは針金のような体形になっている。また、運動を支える筋肉の発達もすぐれている。

原始甲虫の幼虫は下口式hypognathousといわれるが、ナガヒラタムシ亜目(始原亜目)を始め、原始的と考えられる形態を維持しているグループに前口式pronothousのものが少なくない。脈翅目も前口式である。下口式は植物食性に、前口式は動物食性(捕食)に適しているが、植物組織に穿孔するものでは後者の方が有利となる。頭部を前胸で囲むことによって口器の働きは強化され、堅い材への穿孔を容易にする。ハムシ上科(カミキリムシ)は下口式の弱点を前記の構造で補っている。ホタル上科では頭部の小型化と頸部伸縮を可能にしたことによってマキガイ類への攻撃能力を増大させた。口器、とりわけ大あごは、その形態と機能から「咬みつく」「咬み切る」「咬み砕く」「削りとる」などに分けることができる。

葉上生活の幼虫においては落下を防ぐさまざまな手だてがみられるが、テントウムシ科の多くとハムシ科の一部にみられる爪の働き(葉毛をつかむ)は注目される。水中生活のものでは呼吸が課題となるため、気門を含めて気管系に改造がみられる。ホタルは気門と気管鰓をそなえる。ガムシは気管を空気を貯える巨大な袋としているなど、すぐれた適応がみられる。水中生活のものでは第8腹節の気門に呼吸の機能を集中させているものが少なくない。

尾突起を含めて第9腹節の形態と機能はきわめて変化に富む。この環節を硬化させることで外敵(捕食者)に対する体の弱点を補っているものは多い。

形態と機能は系統発生からも深められるべき課題である。分類を志す方が関心を持たれることを期待したい。

(一般講演)

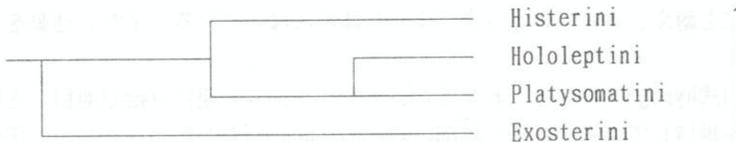
日本産エンマムシ亜科 (甲虫目、エンマムシ科) における形質評価と系統

北海道大学農学部昆虫学研究室 大原 昌宏

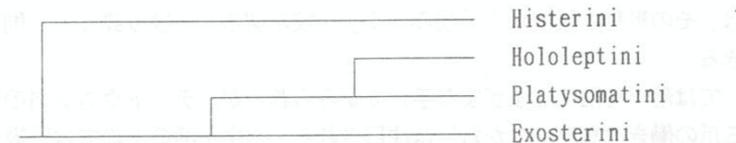
日本産エンマムシ亜科 (Histerinae) は5族: Exosterini, Platysomatini, Hololeptini, Omalodini, Histerini に分類され、日本には Omalodini を除く4族が分布している。演者はこの4族に含まれる8属28種 (Platysomatini を除く) について分類学的な再検討をおこない、*Merohister aino* (Lew.) を再確認し、*Margarinotus cadavericola* (Bickh.) を日本未記録種*、*Margarinotus* sp. を未記載種として見出した。さらに日本産属をもとに、4族間で祖先-子孫関係を決定できた形質について分岐分類学方法を用い形質分布表を示した。本講演では主に族間関係について論じた。

形質の評価と分岐分析の結果を以下に示す。

1) 前脚の形態により、Exosterini が他3族の外群とみなされ、さらに体形、前脚のふ節溝より、[Hololeptini, Platysomatini] が、Histerini と分けられる。他の形質に関しても Exosterini がより祖先形質を多くもち祖先的と考えられる (下図)。



2) しかし、Histerini は後翅、♀受精囊、♂交尾器中葉の構造が他の3族と著しく異なり子孫的とみなされる。他の3族はそれらの形質を祖先形質として共有している。これらの祖先形質共有、Histerini の固有子孫形質を重視すると下図が得られ、Histerini と [Hololeptini, Platysomatini] の前脚の構造に平行が起きたと示唆される。



*) 標本の一部は中根猛彦博士のコレクションに基づく。

ルイスチャイロコガネ *Sericania lewisi* の体色黒化に見られる地域変異

片倉工業株式会社生物科学研究所応用昆虫研究室 平沢 伴明

ルイスチャイロコガネは本州中部から東北部にかけて分布するが、前胸背と翅鞘の色彩と紋様にかんりの変異 (黒化) が認められ、それは多少なりとも地域的に不連続するようと思われる。本種の含まれるチャイロコガネ属は日本列島で複雑に種分化しており、同定が困難なほど互いに近似しているが、本種の変異を解析することで、種分化の機構解明のヒントに繋がるかも知れない。変異の生物学

的な背景を推定するためには、総計146個体、産地数34箇所の材料だけでは余りに不十分であるものの、現段階におけるそれらの形質の大まかな地域の変異の傾向を調査し、それらが7つの個体群に類別されるのではないかと仮定してみた。

変異のパターンは、主に前胸背と翅鞘において黒化範囲が拡張されてゆくものである。それらを4～7つの段階に分け、連続性を考慮にいれて数値化し、これを黒化度数(MP=Melanization Parameter)と呼ぶことにした。産地によってかなりの偏りが個体数や性別にあるが、概略を掴むために敢えて有意性を問わずに処理して産地別のMPを算出した。

その結果、7つの個体群のうち4つが長野県周辺で互いに近接しており、その境界線はコブヤハズカミキリやアサマシジミなどでみられるものと一致するものが多いことがわかった。しかし、その理由は依然として不明のまま、今後の問題となった。

オオネクイハムシの生活史

水戸市立博物館 成田 行弘

Plateumaris constricticollis jacoby オオネクイハムシ (=オオミズハムシ) は、日本からは20種類が知られているネクイハムシ亜科甲虫の1種で、その分布や分類学上の特徴として、日本固有種であること、本州で4亜種に分化していることが挙げられる。

本講演では、これら亜種の分化過程などを考えるうえで重要と思われる生活史の調査結果として、本種の幼虫、ならびに食草の発見と、その生活史についての考察に言及した。

なお、これらは福島県南部の鮫川村における6回の調査結果をまとめたものであった。

・幼虫の形態や生活史について

幼虫は、すべてアゼスゲの根から得られたためそれを食草と判断した。

幼虫の形態的な特徴は、頭蓋や触角の形状、単眼の数や配列、脚部各節の長さの比などに認められた。ことに、頭蓋の形状と、単眼の数とその配列は、種の特徴が明白であるとともに、各幼虫期を通じて安定した標徴で、今後、ネクイハムシ亜科幼虫の同定には有効であると思われる。

また、6回の調査時すべての時期に蛹(繭内で成虫になっている個体も含む。)やさまざまな段階の幼虫が見られたが、このことは、1化に2年以上を要することを示すものと考えた。

・まとめ

以上、簡単に述べてきたように、幼虫の形態と生活史についての推測を中心に講演を行った。これらの調査を、さらに、本種の他の亜種へ広げることによって、亜種間の関係などが明らかになるだろう。

最後に、本報告の詳細については、ネクイハムシ研究会の会誌である「Donaciist」に、本調査の共同研究者であった久保田正秀氏と共著で投稿し、現在印刷中である。

パソコンを使用した甲虫類の情報処理について

(財) 日本野生生物研究センター 齊藤 秀生

先月開催された日本昆虫学会大会のシンポジウムのテーマは、「分類とコンピュータ及びその周辺機器の利用」というもので、3題の講演があった。

大分医大の宮田さんは、光ディスクによる画像登録により大型蛾類の交尾器の図をすべて登録し、それらを分類学に応用しようというもの、北大の中田さんは、秤量機器と画像処理の利用によってカイコの幼虫期段階での雌雄判別処理への応用について、九大の多田内さんは、公用昆虫学データベースとその使用を想定した分類作業システムについて、発表した。

このように昆虫の情報についてコンピュータを使用していこうという試みは今進みはじめている。

しかし、この3つの例はいずれも現状では特例であり、予算や規模、扱い易さなどの点から今すぐに私達の利用可能な状態になるとは言えないようだ。最も興味深かった公用昆虫データベースでさえ、北大・東大・農工大・京大・阪大・九大等といった大学間の大型コンピュータネットワークにアタックしなければ使用できず、端末を使用する際のコマンド（コンピュータへの作業命令指示語）も一般には複雑で、その方面の知識がなければ難しい。

そこで今すぐに使用できるような状態での情報処理のシステムが必要となる。最も身近なものは、パソコン（パーソナルコンピュータ）であろう。

パソコンを使用してどのような作業ができるのか、

① 採集データの整理と活用

普段から記録している採集データをパソコンに入力するようしておくことにより、必要な科や日付け毎に集計したり、編集して報告文を作成する。または、採集データから分布図を作成させたり、日付けや場所のデータから採集適地や時期を知る等

② 各分類群の目録の保管とその更新

各分類群の目録をパソコンに保管し、それを活用することによって報告文や論文作成の際の辞典としての使用

③ 各地方の研究者との分布等の情報交換

各地方の分布等の情報を交換し合い、使用しながら蓄積していく、等々・・・
様々な使いみちがある。

しかしここで大きな障害となるのは、私達人間側にパソコンを使用するための準備が整っていないことである。

採集データを常に同じ様式でまとめていない、種名を参考にしていない図鑑が異なっている、採集地点の名称が不統一である、その他、誤同定・入力ミス・勘違い等に至るまで、多くの問題は、パソコンにデータを入力する以前にあるようだ。

したがって、今後膨大な甲虫類の情報を処理していくことが必要となり、ますますパソコンを利用していく機会が多くなると予想されるため、私達がパソコンの前に座る以前に準備しなければならない内容が極めて多いことを確認しておきたい。

◎新入会員

会員番号 氏 名 郵便番号 住 所



◎再入会



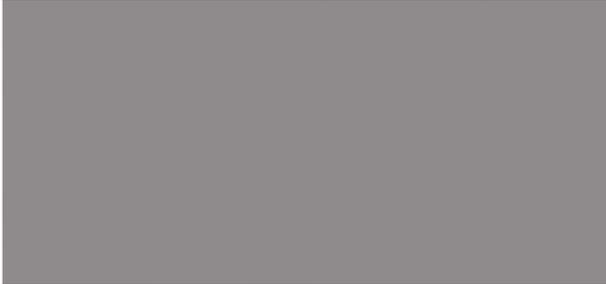
◎住所変更（新住所）

会員番号 氏 名 郵便番号 住 所



◎訂正

会員番号 氏 名 誤 正



◎退会



◎認定退会

丸2年間会費を滞納されている方は、残念ですが認定退会あつかいとさせていただきます。



◎死亡



— 会務のご案内 —

会費はなるべく下記の郵便振替口座宛にお振込下さい。現金書留などに比べて送金の費用がはるかに安くなります。

東京 0-147871 日本鞘翅目学会

郵便振替の送金に関しては、原則として領収書は発行いたしませんので、送金時にお手元に残る控えを保管下さい。領収書を発行する手間は大変なので、会務の軽減化のために'84年度末から郵便振替口座を作りました。ご協力いただければ幸いです。なお、現金書留・定額小為替による送金については、領収書を発行いたします。

会費は前納制になっていますので、お早めにお納め下さい。毎年、後半にお送りする会誌と一緒に翌年度分の会費納入状況をお知らせしていますが、その折りにお知らせする会費請求においてもさらに送金のない場合は、後半の会誌から発送を打ち切らせていただきます。また、会費が切れて2年たちますと、このままでは認定退会の扱いとなる旨のおハガキを出しています。認定退会になった場合、その後新たに入会される場合は会費の他に入会金が必要となります。

会誌のバックナンバーはすべて「TTS昆虫図書」で扱っています。1980年度より完全に委託しており、事務局などでは一切受け付けておりませんので、必ずTTS昆虫図書の方へお申し込み下さい。

TTS昆虫図書 〒973 いわき市内郷郵便局私書箱11号
(Tel. 0246-27-2521 郵便振替：東京0-73156)

"ELYTRA" Vol. 1 No. 1, Vol. 2 No. 1 & 2 (1987-74)	3冊組 ¥2,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 3 Nos. 1/2, "さやばね" No. 1 (1975)	2冊組 ¥2,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 4 No. 1 & 2, "さやばね" No. 2 (1976)	3冊組 ¥2,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 5 No. 1 & 2, "さやばね" No. 3 (1977)	3冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 6 No. 1 & 2, "さやばね" No. 4 (1978)	3冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 7 No. 1 & 2, "さやばね" No. 5 (1978-80)	3冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 8 No. 1 & 2, "さやばね" No. 6 (1980-81)	3冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 9 No. 1 & 2, "さやばね" No. 7 (1981)	3冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 10 No. 1 & 2, "さやばね" No. 8 (1982)	3冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 11 Nos. 1/2, "さやばね" No. 9 (1983)	2冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 12 No. 1 & 2, "さやばね" No. 10 (1984)	3冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 13 No. 1 & 2, 会員名簿 (1985)	3冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 14 No. 1 & 2, "さやばね" No. 11 (1986)	3冊組 ¥3,000 (〒200)
"ELYTRA" Vol. 15 Nos. 1/2	1冊 ¥3,000 (〒200)

1985年度会計報告

(1985年1月1日～12月31日)

収 入		支 出	
前期繰越	307,223	ELYTRA 12(2)印刷代	637,000
入会金	4,000	ELYTRA 13(1)印刷代	538,370
バックナンバー代	95,600	カミキリ大図鑑経費	50,000
1985年度分会費	483,000	カミキリ大図鑑印税	
1986年度分会費	181,000	(著者へ)	1,539,000
1987年度分会費	10,000	ビノキュラー代	
広告費	66,500	(サロンへ設置)	110,000
別刷代・超過印刷代	468,920	総会準備費	60,000
総会会場費	32,500	送料	257,360
利子	1,368	事務関係費	8,070
カミキリ大図鑑印税		アルバイト代	15,000
(第二回分)	656,800	次期繰越	370,111
(第三回分)	900,000		
(第四回分)	378,000		
合 計	3,584,911		3,584,911

1986年度会計報告

(1986年1月1日～12月31日)

収 入		支 出	
前期繰越	370,111	ELYTRA 13(2)印刷代	411,615
入会金	6,000	ELYTRA 14(1)印刷代	394,535
バックナンバー代	282,000	ELYTRA 14(2)印刷代	438,675
会費	612,000	さやばね No.11 印刷代	291,100
広告費	100,000	会費名簿印刷代	88,500
別刷代・超過印刷代	129,937	総会費 ('85.86年度)	135,750
総会会場費	29,000	送料	258,950
利子	4,583	事務関係費	77,100
寄付	3,170	アルバイト代	25,000
		次期繰越	-584,424
合 計	1,536,801		1,536,801

1985年度および1986年度の会計報告において内容の重複など矛盾がみられますが、これは、1986年度より会計報告の内容をきちんと年度毎としたことによるものです。

1987年度会計報告

(1987年1月1日～12月31日)

収 入		支 出	
前期繰越	-584,424	事務費	57,608
会費	815,500	ELYTRA 15(1/2)印刷代	492,685
入会金	3,500	送料	43,600
寄付	4,480	総会費	60,300
広告費	30,000	税金	6
別刷代	56,180	繰越金	-122,643
バックナンバー代	41,300		
利子	1,300		
中根論文集残金	6,120		
総会会場費	48,500		
総会会場費 (築地書館より)	9,100		
著者負担分	100,000		
合 計	531,556		531,556

中根猛彦先生退官記念論文集 (日本鞘翅目学会別報告第2号) 会計報告
(1985年11月11日～1986年12月29日)

収 入		支 出	
協力金(430口)	2,150,111	論文集印刷代	2,340,000
寄付金	1,000	論文集梱包・発送費	249,300
超過ページ印刷代	369,000	返金(1口)	5,000
TTS昆虫図書より		趣意書印刷費	22,600
論文集30冊代金	147,000	アルバイト代	21,600
		送料(通信事務)	22,380
		残金	6,120
合 計	2,667,000		2,667,000

*残金 6,120円のほか、TTS昆虫図書へ委託した50冊のうち
まだ売れていない分15冊の代金 75,000円(5,000円×15冊)
が未収で、最終的には 81,120円の黒字となる予定。
なお、この残金は、学会の収入とさせていただきます。

さやばね No.12 昭和63年11月20日発行

編集者：斉藤秀生 斉藤明子

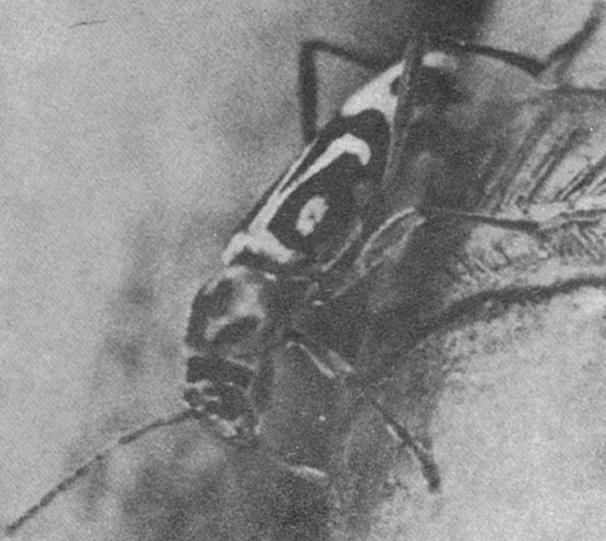
発行所：日本鞘翅目学会 (〒110 東京都台東区東上野4-26-8、福田惣一方)

<振替口座 東京-0-147871>

株式会社

志賀昆虫普及社

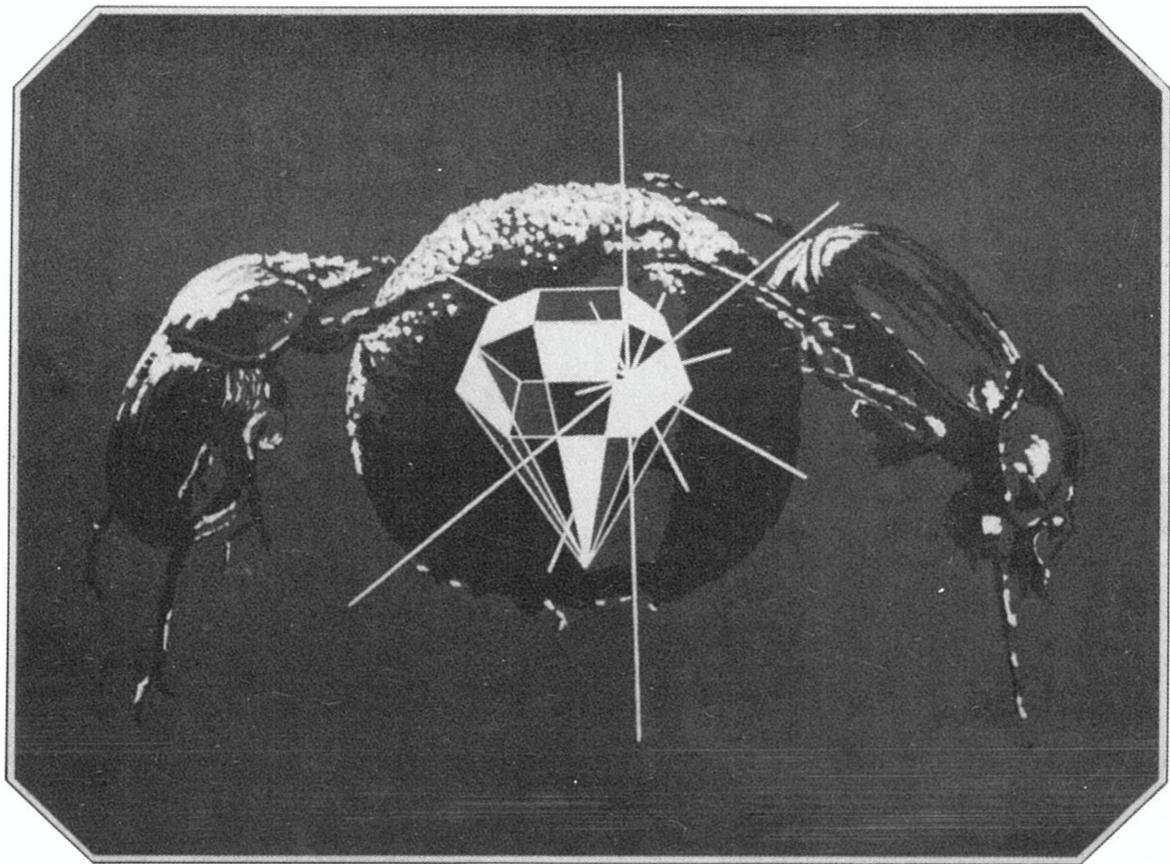
〒110 東京都渋谷区渋谷1丁目7番6号(宮益坂上)
TEL. 03(409)6401(代) 振替/東京21129



●新製品/最上質ステンレス製シガ有頭昆虫針
0. 1. 2. 3. 4. 5号発売中

●専門用カタログあり 要郵券 140円
営業種目 採集瓶・採集箱・幼虫飼乱・採集バンド・展翅板類・
飼育用具・顕微鏡・標本箱各種・三角ケース・捕虫網・標本瓶・植
物採集用具・殺虫管・プレパラート製作用具・名箋・ピンセット・
平均台・液浸用管瓶・ルーペ類・コルク類・その他

営業時間：9時～18時
休日：毎日曜，祝祭日，10月1日



真珠より美しく ダイヤより価値がある 大切な標本を永久に守る 《ドイツ型標本箱》

自然はますます大切なものとなってきました。この不思議な世界を解明する貴重な手掛りとなる昆虫標本は、価値あるものとして永久に保存したいものです。

そんな願いをこめて、タツミ製作所では、昆虫標本の保存に最適なドイツ型標本箱をお届けします。

*すばらしい特長

- くるいのこない良質な木材を使用
- 湿気や乾燥にも強い独特の構造
- パラソールにも変化せず、標本がより美しく見える白色プラスチック底

●高級ニス塗装の丈夫で美しい仕上げ

※標本箱のほか、展翅板など昆虫標本作成に必要な器材もあります。

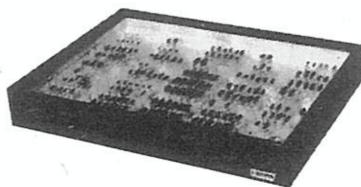
昆虫器材カタログ、昆虫関係輸入図書・委託図書リストもあり。

〒113 東京都文京区湯島二丁目二番五号

電話 〇三(八一)四五四七

郵便振替 東京一三三四七九

(有)タツミ製作所



大型
4,500円(送料別)

中型
4,000円(送料別)

この価格は昭和51年4月現在のものです